

## 在宅自立者から観た希望と課題

○内山幸久 (有限会社ネットワーク・コンソーシアム)

“福祉とロボット”と言うと、昔は大きな手をくっけたゴツイ物をイメージしたらしい。しかし、今は食事搬送ロボットや、食事ロボットなど、はたまたペット・ロボットが一般的にはイメージしやすいだろう。しかし、福祉ロボットと言われてもなかなかイメージしにくいのが本当だ。

私の住む地域には、他に4名、同じ頸髄損傷という全身性のマヒ障害者が、一人暮らしをしている。他の障害(脳性マヒや筋ジストロフィー)でも数名が同様に生活している。私も含め、彼らに「福祉ロボットって何をイメージする?」「ロボットに何をして貰いたい?」と尋ねても、そうそう出てくるものではない。決して、「感情論だけで「ロボットでは寂しい。」「家族やボランティアの暖かい手があれば良い」という訳ではない。ロ

ボット技術をどう福祉という分野に役立て良いか、ロボット屋さん達と別の意味でわからないのだ。

しかし、ロボットの技術は、絶対に福祉の中で役に立つはずである。(役立てないと知恵と技術が勿体ない)そのためには、障害者や高齢者の、生活の本当の中味を知らなければならない。

そこで、今回私は、同じ障害を持つ仲間の“生活や事前に聞いていること”、または“知っていること”を中心に話したい。当日、話題にするか解らないが、現時点で数例を挙げよう。

1. ロボット技術を取り入れたエアマット
2. 車椅子の座面を常に平行に保つロボット
3. 体バランスの変化に付いていく、手動車椅子の車輪位置を自動調整するもの

## 臨床から観た在宅の現状と課題

○稲坂 恵 (横浜市立港湾病院)

かつてピアノを弾くロボットのデビューは衝撃的であった。楽譜を読み指で鍵盤を奏でるスマートなヒューマノイドに目を見張った一方、同時期の歩くロボットの無骨さに、職業柄親近感を抱いたものである。エネルギー効率の最も良い動作を追求する理学療法上にとって、無意識化の自律歩行が最高のモデルであるのに対して、患者の歩行再獲得は多大な困難さを伴うという現実が重なったからだ。

歩行に限らず我々が日常的に難無く行っている動作を、患者が改めて構築するとなると、決して一筋縄では行かない。そして“漸く獲得できた動作が在宅生活に生かされていないのでは?”といった指摘は未だに多い。のでは?”といった指摘は未だに多い。整備された病院で可能であった動作も、在宅では介助を受けるといふ例が後を絶たないのだ。問題はハード面のみならず、気兼ねのない家族には頼み易いといったソフト面も考えられる。生活環境、家族関係、社会的役割というような因子が絡む在宅生活では、患者が獲得した能

力を生かし切れないといった状況は多い。しかし在宅へ獲得能力を持ち込める最適な手段として、個別の在宅状況を想定した排泄方法の習得が上げられる。他者の手を借りたくない行為の筆頭が排泄であることから、患者自身の動機は十分であり、一日に数回施行される行為は、機能維持の役割を果たすからだ。既に後始末方法は解決された段階であり、残る問題は移乗や立ち上がり動作になる。学校の好意でトイレに手摺をつけた途端に、便座から立てなくなってしまったジストロフィー児童のことを思い出す。この症例に限らず、トイレと手摺にまつわる話は多い。

人間共存ロボットの開発に、“人間を知る”という研究が進んでいると聞く。機能性、安全性に加え、人の肌や心に感じる温もりをもロボットに求めたい。人間の心に潜んでいる差別感を持たないロボットに、人間の尊厳という点で、託せることは多いかもしれないと最近感じている。